

中学校放送部員が動かす学校の創造

～コミュニケーション活動の活性化のために～

市内合同の研修会から得たノウハウと人的関係をベースにして

研究者名

代表者 秋森 洋子

共同研究者 平松 茂¹⁾ 荒尾 真一²⁾ 上田 達伸³⁾ 中倉 智美⁴⁾

三好 正直⁵⁾ 藤原 昭雄⁶⁾ 山本奈穂子⁷⁾

要 約

情報化社会の中で、生徒はメディアを容易に使いこなす反面、情報に流され易く、自分の主張が無かったりする。情報を毎日扱う放送部員ですらその傾向は強い。こうした状況にある放送部員に、生きて働く力につながる情報活用能力を身に付けさせる方策として、校内放送を担当する放送部員とその指導者である顧問の研修を実施しようと考えた。

具体的には、放送部員と顧問に対して、目的を明確にした丁寧な研修を行い、情報活用能力を伸ばそうと考えた。顧問も、放送部の指導法はもとより、アナウンスや機器操作の技能等を実践的に習得できる。そして、研修会で実践的な力量を身に付けた生徒が各学校で活躍することにより、情報活用能力を身に付けた生徒を作り出す学校へと変容すると考えた。

本研究では、岡山市で継続している市内合同の中学校放送部員と顧問のための研修会を見直し、情報活用能力につながるコミュニケーション能力の育成、放送番組作成の技能の習得、番組の企画・構成と演習を強化する。また、インタビューのための技能を身に付け、勇気を出して実践できるための技能を身に付け、学校間交流を深め、他学校の実態を肌で感ながら研修を進めるため、研修会中は、各生徒が所属する学校とは異なる学校の生徒でグループを構成した。

研究の結果、インタビューやアナウンス、放送機器を扱う技能はもとより、人間関係を作る力、インタビューの勇気、番組作成の意欲等が高まり、各学校での放送部が活性化するなどの変化があり、本研究が情報活用能力の育成に効果があることが認められた。

代表者勤務校：岡山市立吉備中学校（前任校：岡山市立高松中学校）

共同研究者勤務校：1) 岡山市立岡北中学校（前任校：岡山市立藤田中学校）

2) 岡山大学教育学部特任教授

3) 岡山市立上南中学校

4) 岡山大学教育学部附属中学校（前任校：岡山市立高松中学校）

5) 岡山市立岡山中央中学校

6) 岡山市立福南中学校（前任校：岡山県立岡山操山中学校）

7) 岡山市立芳泉中学校

1 はじめに

最近の生徒は、生まれた時からメディアに取り囲まれており、メディアを容易に使いこなす反面、内容が薄いものであったり、情報に流されてしまい、自分の考えや主張が無かったりすることがある。日頃から校内の生徒たちに情報を伝えることに強い興味関心をもっている放送部員ですらその傾向は強い。

このような状況にある放送部員に、どうすれば生きて働く力につながる情報活用能力をつけさせることができるか、そして、校内での情報発信の主役とさせることで、学校全体の生徒の情報活用能力を伸ばすことにつなげることができないかという視点で、今まで12年間継続して取り組んできた市内合同の中学校放送部員と顧問による研修会を見直すことにした。そして、この研修会を、日頃の校内の活動につなげ、発展させようと考えた。

岡山市では、以前から自主的に学校放送の研修会を行っていたが、平成9年度から岡山市中学校教育研究会情報教育部会が中心となって、夏季休業中に教師と生徒のための学校放送研修会を実施している。参加生徒は、今後の活躍が期待される1、2年生が中心である。夏の「NHK杯中学校放送コンテスト」終了後であり、技術の習得、他校生との交流、情報交換を目的としている。引率教員は、放送部の指導法はもとより、アナウンスや機器操作等の習得も期待できる。

この活動も既に10年以上経過しており、指導者の世代交代とともに、機材が老朽化しており、デジタル化への移行と合わせて機器の更新も必要となっている。また、新しい時代に向けて、情報活用能力の育成とコミュニケーション能力の伸張を進めたいと考えた。

研修会の内容は、機器の扱いやアナウンス等の技術面を主としてきたが、今後の活動の活性化を意図し、取材して情報発信するまでの一連の活動を通して、情報活用能力を育てることに主眼を置いたものにする。また、市内の学校を会場として行う年数回の半日程度の研修会と夏の宿泊研修会が、日常の学校での活動と連動しにくいとの反省があるので、有機的かつ機能的につながる効果的な研修とは何かを、本研究を通して提案したい。

本研究により、研修会実施のための知見を蓄積し、マニュアル化することにした。具体的には、機器の操作、番組の企画と制作、アイデアのまとめ方などを記録に残し、後輩に伝えるとともに、この研修会の成果を各学校で生かし、広めようと考えた。

研究の主な項目は次のとおりである。

- ① 研修会を実施するための講師の選定、指導内容や指導方法を明らかにする。
- ② 放送研修会を実施し知見を蓄積する。また、研修会を振り返り、次年度に向けた改善を図る。
- ③ 研修の成果を各学校の実践に生かし、コミュニケーション活動を活性化させる。

研究の視点として、合同研修会を核にして放送部員を育てるポイントを次のように考えた。

① 基本的な部分

- ・自分たちのメッセージが相手に伝わるよう情報発信をさせたい。これはPISA型の学力にもつながるものとする。
- ・生徒それぞれの良さを引き出し、ものを見る力や、考える力に気付かせて育てる。
- ・力を合わせて一つの作品を完成させることにより、協働する力を育成する。
- ・話し合いによってそれぞれの生徒がもつ価値を認め合い、尊重する力を伸ばす。

- ・取材される側に立って考えようとする心を育成する。
- ② 情報活用能力の部分
- ・具体的な番組制作を通して、取材の技術を身につけ、情報発信することにより、メディアの活用能力を育成する。
- ③ 宿泊研修会が核になって継続的に取り組める仕組みづくり
- ・合同研修会で習得したスキルが日々の学校での活動で生かされる方法を見つける。
 - ・お互いの学校での活動について情報交換できるシステム作りを進める。
 - ・次年度の研修会が参加者のニーズに合った内容になるように工夫する。

以上の視点で夏の宿泊研修会を企画し、参加した部員の情報活用能力や人間関係力を評価し、研修の効果を探る。更には、放送部員が学校でどのように動けば他の生徒の情報活用能力の育成に効果的であるか考えたい。

2 研究の領域

以下の各領域に焦点を当てて研究する。

- 情報教育のねらいである情報活用能力（情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度）の育成
- 生徒の情報活用能力の育成
- 情報教育に役立つシステム、カリキュラム、コンテンツの開発
- 教員のICT活用指導力を高める研修の実践と能力向上に関する評価

具体的には、次の①～③を実践し、今後、継続発展できる知見を蓄積する。

- ① 放送部員としてアナウンスや放送関連機器の扱いなど学校の教育活動に貢献できるための基本的な技術と能力を習得させる。各学校での教育活動を主体的に取材し情報発信することによって、学校教育活動に参画していることを自覚させ、自分たちの活動の意義を見出させる。また、取材して1つのメッセージとして構内に情報発信することにより、一般生徒の情報活用能力の育成にも繋げたい。
- ② 放送部員が意欲的に校内の教育活動を取材して情報発信できるシステム作りを進める。
- ③ 合同研修による指導教員のスキルアップ（アナウンス講座や夏の研修会）
- 研修会で得た人的ネットワークで継続的な発信・交流を行うとともに作成したコンテンツを交換する。このことにより、放送部の活動を部活動だけで終わらせず、総合的な学習の時間など、校内での発表活動での推進役にさせ、そこから、学校全体のスキルアップに繋げる。

3 研究の経緯

(1) 放送研修会を始めた経緯

岡山市内の中学校放送部員を集めて放送研修会を始めたのは平成9年度である。市内の多くの中学校では放送部の活動があるが、学校間での情報交換はほとんどなく、顧問の技術水準もまちまちであった。また、放送部の通常の活動も校内のお知らせ程度で、自分たちから情報発信する番組作りなど、年1回のコンテストを除いてほとんどなされていない状況であった。以上のことについて、市内の視聴覚担当者の会で話題になっていた。そこで、まず、放送部担当の顧問を対象に調査を行い、問題点を明らかにすることにした。その結果、「アナウンスの基礎的な指導」「録音技術の指導」「ビデオ撮影の指導」など放送の基本といえる技術指導で困っていることが明らかになった。これを受けて、市内の放送部顧問と生徒を対象に研修会を実施する呼びかけを行い、市内の学校を会場に年2回程度の研修会と夏の1泊2日の研修会を行うことにした。

(2) 実践

実践を始めた平成9年度当時は、情報関連機器が身近に氾濫し始めた頃であったが、指導者の顧問も、生徒もどう使って良いか分からない。しかし、指導者は社会でのメディアの重要性を何となく分かっている。そして、学校における番組作りでは情報活用能力やコミュニケーション能力を集中的に養うことができる。そんな思いが強くあった。

回を重ねるにつれて顧問と生徒がプロから学んだノウハウや他の学校の実践を各自の学校にもち帰ることができ、それぞれの学校における日々の放送部の活動に番組制作などを入れることで学校放送が活性化し、継続して連携することもできはじめた。

その後、会場の確保が困難な時期もあったが、研修会は10年以上も続いている。参加状況は、宿泊研修は平均して生徒30名から40名程度、顧問教師15名、参加校5～6校である。

(3) 最近の課題

この研修会も、放送機器を持ち寄ったり集めたりして何とか実施してきたが、最近のデジタル化の波と保有機材の老朽化で、研修会を持つこと自体が難しくなってきた。

また、最近の生徒の傾向として、音声番組制作に弱い、ビジュアルに強い、テレビ番組の制作に関して鋭い感性がある等の実態がある。さらに、ノンリニア編集の低価格化と簡易化で、あまり深く考えなくても作品が作れてしまうので、伝えたいことが不明確であったり、表現の深みがなかつたりすることもある。特に、アナウンス、コメント等に関する技術の未熟さが目立つ。また、1つの作品を協働して作るといった経験も少なくなってきた。

長年にわたって研修会を持つことで顧問教員の間にしだいに人間関係ができてきた。しかし、研修会ではお互いの指導や機器の扱いなど日頃の悩みを話し合うことが多く、それぞれが課題を抱えているにもかかわらず、学校での日常的な活動で連携するまでには至っていない。

以上のことから、今まで培ってきたノウハウをどのように再構成すれば時代のニーズに合った研修会をもつことができるか、研修会そのものの内容を根本から見直す必要が出てきた。

4 研究の計画と実施方法

(1) 1年目の活動（H21年度）

平成21年8月23日（日）～24日（月）にかけて、1泊2日で国立吉備青少年自然の家で合宿研修会を実施した。ここでは、研修内容を精選・改善し、研修内容を関連付けるようにした。

主な日程は次のとおりである。

第1日目	午前：入所，オリエンテーション，アナウンスの基礎 午後：インタビューのコツ，インタビューの収録及び編集の企画 夜：録音構成による番組制作，2日目の活動や企画
第2日目	午前：機器の使用法習得，取材（音声）編集 午後：番組の発表会と批評

研修会終了時まで引率教員間で相談し、合宿研修会で活用した機材を希望する参加校に貸与した。研修中、番組を企画・構成・編集しながら使用方法を習得した機器をそのまま学校に帰って活用することで、容易に今後の各学校の放送部の活動に生かせると考えたからである。

次年度の夏までに、これらの機材を活用して育成した情報活用能力やコミュニケーション能力の育成状況を考察したり、作り上げた作品や日頃の放送部の活動について考察を進めたりしようと考えた。そして、2年次の研究に向けた改善の資料とする。

(2) 具体的な研究実践計画の立案

ねらい：放送部員と顧問教員のスキルアップ

平成21年4月～平成22年3月

- ① 研究メンバーによる研究推進計画の共通理解と具体的な取り組みの立案（4月）
 - ・研究の内容についての共通理解
 - ・分担ごとに具体的な実施素案を計画
- ② 講師手配（5月）
- ③ 必要機器の購入（5月）
- ④ 半日研修の実施（6月）
- ⑤ 夏の宿泊研修会の計画（7月）
 - ・育てる情報活用能力についての共通理解
 - ・基本の技術指導と合わせて取材及び情報発信のノウハウが習得できる研修の実施
 - ・継続的な情報交換方法の共通理解
- ⑥ 研修会の実施（8月）

重視する点

- ア) 作品作りを通して基本的な情報活用能力を習得させる。
 - ・情報活用の実践力，機器（メディア）活用能力，取材のノウハウのスキル
 - ・一つの作品をグループで作りに上げさせることによる協同情報発信
- イ) 制作した作品を評価し合うことで、さらに高次の情報活用能力を身に付けさせる。
 - ・人に伝わる作品になっているか（相手に伝わる情報発信 PISA型の学力）
 - ・自分たちが表現したかったことが伝わったか，理解されたか

- ・再取材や構成のやり直し（足りないところに気付かせる）
- ウ）価値観が違う生徒が1つの協働によるコンテンツ作りを通して、話し合いによって生徒がもつ価値を深め、高め、継続的な人的関係の構築を図る。そして、今後の作品の交換につなげる。

⑦ 先進校視察および情報収集（8月～12月）

⑧ 各校での実践

研修会後学校へ帰って研修会で身に付けた方法で情報スキルをどう校内に広げるか放送部員が核になる効果的な場や方策を探す。

⑨ まとめ（1月）

- ・研修会の取組と各学校での取組をまとめ、結果の分析と課題の発見を行う。
- ・各実践事例を分析して、効果的な指導法や取り組みをまとめる。
- ・発表の機会を考える。

（3）2年目の活動（H22年度）

1年目の研究の振り返りと改良したシステムでの活動及びまとめ

① 1学期

半日研修会の持ち方の見直し

前年度の各学校での実践例の持ち寄りと分析

前年度の2学期からの実践を基にした夏の宿泊研修会の企画立案

講師の交渉

② 夏の研修会実施（8月）

研修会での活動記録および生徒、顧問からのアンケート分析

各学校での実践を共有

③ 2学期

研修会で得られた成果をヒントに、各学校で実現できることを実施

実践結果の集約及び学会等での発表

④ 3学期

2年間の研究のまとめ

- ・研修会そのものについて
- ・研修会を核に各学校で連携できた部分について

5 宿泊研修の実際（H21, H22の実践から）

（1）入所式（9：00～）

①開会前に、それぞれ自分の学校の活動や参加の意識などをまとめて研修に備える。（写真①）

②平松校長より、参加者の心構えについてのお話。（写真②）

「合宿研修のねらい、合宿研修で身につけて欲しいこと、お互いに学校の活動状況を話し合ったりし、他の学校の仲良くなって活動の様子を聞いて学校へ持ち帰って欲しい。今後しっかり活



躍する基になるものを持って帰ってください。」

③参加する教員の紹介。(写真①)

本合宿研修は生徒が放送についての基礎的な技術や考え方を勉強するだけでなく、合宿の各セッションで取り上げられた活動や展開の仕方を、指導者も共有して持ち帰ることに大きな意義がある。ここでは、参加校の先生方が自己紹介をし、生徒たちの意識を高める。

④写真右端(写真②)の先生は本合宿研修が開始されたころ、中学生として参加していた。その後も時間があればこの合宿研修に参加し、ボランティアとして支援をしながら自己の研修の場面としている。同写真(写真②)左端の女性は本大会事務局であり、企画立案の担当者である。

⑤研修場所である国立青少年自然の家の職員から使用上の留意点を聞き研修に向けた激励の言葉をいただく。(写真③)

⑥研修参加代表者から国立青少年自然の家の職員へ研修の決意を述べ、「よろしくお願いします。」という挨拶を行った。(写真④)

⑦学校紹介に向けて、打ち合わせ会を行った。(写真⑤)



(2) 学校紹介

打ち合わせ会の後は、各校ごとに、学校の取り組み状況、活動、部員の紹介などがあつた。それぞれ工夫を凝らした紹介で、多人数で一人ずつ話をしたりした。少人数で参加している生徒の中には今回の研修に参加できなかった部員についての紹介を行っている生徒もいた。



1人ででも、堂々とした学校紹介



順番にセリフを回して発表中



イラストを使って工夫を凝らした発表

(3) オリエンテーション

事務局担当より、全体の日程紹介及び諸連絡を行った。しおりを見ながら、国立吉備青少年自然の家での生活、注意点の説明を受ける。会場である少年自然の家を同時に利用している他の研修団体のことや、活動場所についての注意など、各方面にわたり幅広く注意を聞く。



(4) アンケートの実施 (10:20~)

参加に向けた心構えなどをアンケートに書いて、回収する。

(5) 基礎研修Ⅰ「番組制作」(10:30~)

あらかじめ準備した名簿に合わせて班別に分かれて研修を行う。

ここでは、助成金で購入した機材をはじめとし、本研修会で活用する機器の操作法、接続方法などを研修する。機材はすべて持ち込み、以下の機材を活用しながら説明する。

説明機材：プロジェクター、自立型スクリーン、PA（放送設備）一式、マイク、ミキサー、アンプ、スピーカー、ヘッドホン、デジタル録音機

デジタル録音機をスクリーンに映しながら、機能説明や操作手順の解説（写真①）を行った。説明を聞きながら、実際のデジタル録音機をそれぞれの班ごとに操作してみる。（写真②）さらに、インタビューを受ける人、インタビューを行う人、録音しながら音量を調整する人などに分かれて、操作をしてみる。（写真③）その間、スクリーンには操作方法が映し出されている。



(6) 基礎研修Ⅱ「アナウンス」(11:30~)

フリーアナウンサーの中村恵美さんからアナウンスの基礎についての話を聞いた。（写真④）

今回の自己紹介で特徴的であったのは、中村さんがアナウンサーの仕事をしながら子育てをしていること、夜が明けない早朝から家を出て、県北の現場に向かう取材の前にインターネットや書物を使って、下調べをしたり、必要があれば事前に現地に出かけてあらかじめ現場を知っておくというような、陰の努力が話されたことである。また、アナウンサーになりたての頃の厳しい練習や失敗談の話もあった。練習を怠ると発声発音の力が極端に弱くなるので、現在でも日々の練習を欠かさないとアナウンサーとしての心構えの話があり、放送部員にとって大変貴重な自己紹介であった。



口のあけ方と腹式呼吸の指導



おなかに手を当てながら腹式呼吸練習



息の続く限り声を出す「あー」



① 研修会場に響き渡る声



② 全体の指導の合間には、一人ひとりが具体的な指導を受ける



③ アナウンスの心構えについてのお話

(7) 昼食・休憩 (12:40~)

班ごとに移動し、バイキング形式での食事を取る。中村アナウンサーを囲んで、日頃の話を聞いたり、質問をなげかけたりしながら食事をとった。(写真④, ⑤) また、食後の休憩時間にはアナウンスの仕事や活動について話を続ける生徒もいれば(写真⑥)、午後の準備を行う生徒も見られた。



④ バイキング形式の食事



⑤ 中村アナウンサーと話しながら食事



⑥ 中村アナウンサーとの談笑

(8) 講話・演習 (13:30~)

午後は、「取材の仕方」を研修した。場面を設定し、相手方にどのような質問をすれば、ねらいとする言葉が返ってくるか、番組の組み立て方などを含めたインタビューの方法などを研修した。班に分かれて、オンエアーを想定し、役割分担を行い、実況中継風のインタビューを行い、指導を受ける。

①主導権を握らないが、話に加わりながら話の支援をし、見守りながら助言していく担当の先生。(写真⑦)



⑦ 担当教師の参画

②夏の研修であるので水分補給を考えてペットボトルを準備した。(写真⑧)



⑧ 水分補給のペットボトル

③班によってはインフルエンザを考慮してマスクを着用しているも生徒(写真⑨)もいた。



⑨ インフルエンザ対策のマスク

④参加教師の一人を有名サッカー選手に見立ててリフティングなどを取り入れたインタビュー例を示す。(写真⑩)



⑩ 教師をサッカー選手に見立てて

⑤指導を受けてインタビューの練習を行う(写真⑪)



⑪ インタビューの練習

⑥具体的な修正箇所の指摘を受けながらインタビューを続ける。(写真⑫)



⑫ 指摘を受けてもう一度

⑦他の班は、模擬インタビューを見て研修を続ける。(写真①)



模擬インタビューを見る

⑧オンエアを想定した実践練習。

与えられた3分間を使いながら、スタジオにいる中村アナウンサーから、現場が呼び出されて、予定したインタビューを実施するという設定である。インタビューをする人、カメラマン、ディレクターなどに役割分担して模擬的な実況インタビューを行う。(写真②)



模擬インタビュー本番

⑨実況が終わり、インタビューを受けたサッカー選手の気持ちや、もっと聞いて欲しかったところ、うまくできたところなどをコメントする担当教師(写真③)。



インタビューを受けた感想

⑩他の班の様子を参考に、今度は元校長先生を作業員に見立てて、インタビューの練習と本番。(写真④, ⑤)



インタビューのリハーサル



インタビュー本番

⑪中村アナウンサー扮する「ぶどうづくり名人」。農作業の手を休めてインタビューを受けているところ。(写真⑥, ⑦)



中村アナウンサーの変身



ぶどうづくりのコツは？

⑫他の班のインタビューの様子を真剣に見守る生徒たち。(写真⑧)

⑬実際のインタビュー実習をした感想を求めている。(写真⑨)

⑭研修の担当者である元校長先生から講評を受けている。(写真⑩)



他の班のインタビューを見る



インタビュー実習の感想は？



担当教師からのコメント

(9) 演習「紹介番組制作」(16:10～)

この演習では、アナウンサーである中村恵美さんを取りあげて、人柄、性格、現在の仕事の状況、取材のポイントや苦労話、家事をしながらアナウンサーを務める状況、日頃のアナウンスの技術の研鑽、練習、努力などアナウンスの技法等について、どのような中学校時代を過ごしたか、の6テーマに分けて班ごとに分担して収録し、夕方の番組制作で使用する素材を収集・編集する演習である。



録音構成の6つのテーマ

① はじめに、録音構成を書き上げ、各班で希望を取って取材の内容を分担する。(写真⑪：前ページ)

② 予備取材として自分の班に任されたテーマについての内容を事前取材している。(写真①, ②)

③ 予備インタビューを通じて得られたことを基に、どういう質問をすればいいかなどを話し合う。(写真③)

④予備インタビュー。(写真④)

⑤班の代表が予備調査。(写真⑤)

⑤ 10秒間のBGMのあとにナレーションが入り、その後各班が、およそ2分ずつインタビューを行い、これが6本つながれた後、終わりのナレーションがありBGMをつける。以上で14分になることを確認する。

(写真⑥)

⑦各班全員の前で録音を進める。それを見守る生徒たち。(写真⑦, ⑧)

⑧編集に向けた打ち合わせ。(写真⑨)

(10) 夕食 (18:00～)・入浴

班別にインタビューを振り返ったり、次の企画のことを考えたりしながら食事を取る。(写真⑩, ⑪)

(11) 懇親会

軽食と飲み物が配られトレパン、トレシャツに着替えて、班ごとの交流を深める。(写真⑫)



夜の懇親会

(12) 講話・演習「番組制作について」(20:30～)

①番組制作のための講話及び演習についての指示。(写真⑬)

②「夏」をテーマに二日目の録音構成を行うが、これを想定した番組の企画書作成についての説明を聞く。(写真⑭)



番組制作の講話と演習の指示



企画書作成の説明



事前取材



事前取材



取材の打合



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨

取材の本番

編集に向けた打合

- ③各自付箋紙に、「夏」をテーマに思い
つくことを書き出す。(写真①, ②)
- ④会長の校長先生の指導を受けながら、
午後の演習で収録したインタビューを
編集するために必要なつなぎのナレー
ションを収録中。(写真③)
- ⑤書き出した付箋紙を台紙の上で移動さ
せて、テーマを絞り込む。(写真④)
- ⑥適宜班についての教員から指導を受ける。
(写真⑤)
- ⑥ 各班で仕分け作業が進み、グルーブ
分けされた付箋紙と、録音構成に向け
たアイデア(写真⑥, ⑦, ⑧, ⑨)の
様子。



(13) 朝食

朝ごはんのバイキングメニュー。

(写真⑩)

研修棟(写真⑪)



(14) 番組制作の研修(8:15~)

前夜作成した録音構成を例として取り
上げて本日のねらいを説明する。

その後、テーマとなった中村恵美ア
ナウンサーの仕事、活動などの録音構成8
分20秒を聞く。自分たちの研修した成
果を確認するとともに、本日の活動の意
欲付けとする。(写真⑫, ⑬)

その後、出来上がった作品を聞いた感
想を話し合う。(写真⑭) また、中村ア
ナウンサーの指導を受けての感想を含め
たお礼の手紙を書く。(写真⑮)



録音構成の内容確認



録音構成の作品鑑賞



録音構成を聞いた感想



感想のまとめとお礼の手紙

【生徒感想より抜粋】

- 大きな声の出し方や、発音の仕方などとても分かりやすく勉強することができました。
- インタビューのときに、「伝える」ということと「聴く」ということが大切だと改めて知りました。発声練習の時にも、「伝えよう」と思って一生懸命声を出してくださってありがとうございました。
- たくさんアナウンスのことや、インタビューの仕方などが分かりました。特に、実際にインタビューを知らない人にしたことはなかったので、とてもいい経験になりました。でも、アナウンサーの大変さもよく分かりました。
- 番組作りをして、中村さんのことを知り、子供もいるのに、アナウンサーをがんばっているということや、基礎練習は欠かさずしているということも勉強になりました。「1日さぼったら1年無駄になる。3日さぼったら3年無駄になる」ということをこれからも忘れず頑張っていきたいです。
- インタビューをする時も、年齢のペースに合わせてすることや、無言のうなずきなどをすると「とてもうまいなあ」と思いました。やっぱり相手に伝えたいことを言えるように質問するのは難しいなと思いました。
- 中村さんの発声の仕方がとてもすごかったです。私も、中村流発声法を家に帰ったらやってみます。
- 中村さんのインタビューの仕方が参考になりました。放送部でもインタビューはするのですが、取材のときの雰囲気作りをあまりやっていませんでした。相手の話しやすい雰囲気を作って、自然な話を聞きたいと思うので、これからはやってみたいと思います。
- アナウンサーは取材が大変だったり、失敗したりしてとても苦勞する仕事だと思った。アナウンサーになるには2000時間練習しないと聞いたら驚いた。
- アナウンスの基礎、インタビューの仕方まで教えてくださりありがとうございました。特に、インタビューの5W1H+αが知らなかったもので、とても勉強になりました。
- どんな質問をすれば見ている人に知りたい情報を届けることができるかを考えていたのですが、ピオーネ農家の田中さんへのインタビューはとても難しかったです。

出来上がった作品について元校長先生から指導・好評を受け、次の課題「夏」の録音構成のための取材の仕方や構成の仕方の指導を受けた。(写真①, ②)

昨日のまとめを使った企画を班ごとに思い起こしながら(写真③)、録音準備を行う。(写真④)

少年自然の家の担当者には、事前にインタビュー収録のお願いしておき、さまざまな職員の皆さんにご協力をいただいてインタビューと収録を行った。

(次ページ写真①～⑨)



課題「夏」の着眼点



「夏」の構成企画



企画の詳細を決定



収録の準備



① 事務室へ収録のお願いに



② 研修所員にインタビュー



③ 研修所員にインタビュー



④ 用務員さんにもインタビュー
夏の管理の苦労はどんなことですか？



⑤ 他の班の生徒にインタビュー



⑥ 参加した先生方へもインタビュー



⑦ 緑に囲まれた環境で
収録作業は快調にも進みます。



⑧ 校長先生へもインタビュー



⑨ コメント保留

さらに、インタビュー以外にも、それぞれの班で工夫した音を収録した。

写真⑩：夏にうるさいセミの鳴き声

写真⑪：夏の象徴，扇風機の音

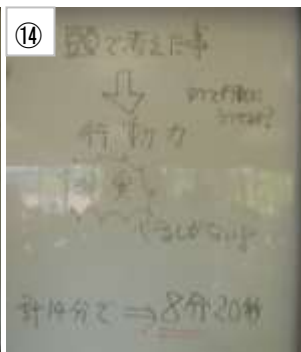
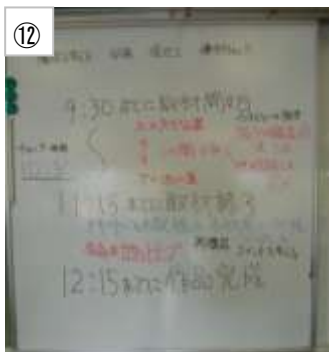


⑩ セミの声を収録



⑪ 扇風機の音を収録

壁面には随所に予定や研修内容，機器の使用方法などが示されている。(写真⑫～⑮)。



インタビュー，録音ができれば，編集作業に向けた打ち合わせを行う。(写真①，②) 先ほど録音したインタビューを再生しながら詳細を打ち合わせる。(写真③)



編集の打合



ナレーションの校正



機器の接続とテスト

編集用の機器の接続はマニュアルを見ながら各班で行い(写真④，⑤)，使用するBGMの選定(写真⑥)，企画のラフスケッチ(写真⑦，⑧)を起こすなど，編集の準備を行った。



機器の接続



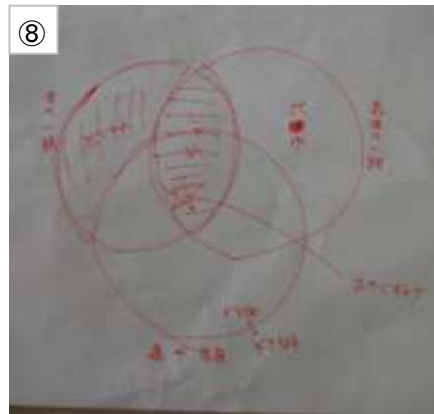
機器の接続



BGMの選定作業



班内での話し合いのまとめ



班の話し合いは模造紙を使って

実際の編集作業は，班内で協力して進めた。(編集の様子：写真⑨，⑩，⑪，⑫，⑬)



編集作業の様子



ナレーションを挟んで編集



編集後に作品の視聴



作品紹介用のタイトル



作品紹介用のタイトル

(15) 研修成果の発表とまとめ (13:15～)

講師の司会によって、午前中に作成した各班の番組が順に紹介される (写真①)。

作品を紹介した後、他の班が、作品を作った班の作成意図を推測してコメントする。(写真①)



制作した作品の紹介

その後で実際に意図したタイトルとねらいについて、紹介する (写真②, ③)。



タイトルの紹介



制作意図の説明



他班の制作意図・苦勞を聞く

納得するものもあれば、別のコメントが挙げられる班もあった (写真④, ⑤, ⑥)。



担当教師のコメント



制作意図についての感想・意見



何が伝わったかを記録する

番組制作発表を聞いて、「何が伝わったか」などの各班へのコメントを、発表が終わるごとに資料に書き込んでいく。(写真⑦)

(16) 退所式

所員から閉所式の挨拶をいただく。

「アナウンスという仕事は素晴らしい仕事である。表現力とか構想力とかこういうことを君達が進めていくことは素晴らしいことだ。これからも頑張るって勉強を続けてほしい。」との言葉をいただいた。(写真⑧)

次に、代表の生徒による終了の言葉で1泊2日の研修を終えた。(写真⑨)

全員で片付けを行い、退所した。(写真⑩, ⑪, ⑫)



所員による閉所式挨拶



代表生徒による終了のこトバ



全員で会場の片付け



研修のために準備された機材



緑豊かな研修施設

6 成果とその活用

(1) 合宿研修会の記録、機材・資料の蓄積について

これまで継続してきた合宿研修の成果と、蓄積された経験に基づいて本研究を進めており、本年度は極力、活動をメモや写真で記録し、指導内容や指導方法等を第三者にも目に見える形で残すようにした。

(2) 成果物

その結果、次の①～④を試作の形で残すことができた。平成 22 年度の研修で加筆・修正し、合宿研修のための成果物とする。

- ② マニュアル化された指導技術
- ② 指導者、指導法、指導内容
- ③ 研修会実施の手引き、デジタル化して一元化した研修資料
- ④ 各学校への普及と実践等々の成果物

(3) 本研究による成果や考察結果等

① 市内の中学生を集めた研修会について

【自らが情報発信者として研修に取り組みせることで得られる成果として】

- ・コミュニケーション能力の育成
- ・情報関連機器活用のスキル

【顧問教員に得られる成果として】

- ・取材が得意な教員と機器の扱いが得意な教員で協働できるポイントの発見
- ・自分の学校における活動のポイントや新しい視点

② 継続的に市内の学校が連携できるシステム作りについて

- ・日常的な部活動そのものの活動についての情報交換と協力
- ・学校内で放送部が推進役になり、学校全体の情報活用能力の育成につながる実践事例についての共有

③ 実践事例冊子のまとめについて

- ・本研究の取り組みをまとめて市内の情報担当に実践事例冊子として資料提供
- ・岡山県および岡山市総合教育センターへ資料提供

④ 本研究で得られた成果を基にした放送部対象の研修会の今後の継続について

- ・岡山市内における継続的な連携
- ・新しい教員にノウハウの継承

(4) その他の成果

生徒が習得した知識技能は形とはなっていないが、次に挙げる成果の手応えがあった。

- ・異なる学校の生徒同志でコミュニケーションを取りながら企画立案できる能力
- ・取材によってデジタル録音された音源を編集して番組に作り上げる技能
- ・企画や編集の意図、できた作品をアピールしたり、他の作品を評価したりする能力

7 成果の発表

① 各種刊行物や学会での発表予定

- ・ 研究組織のメンバーが所属している岡山県中学校文化連盟のリーフレットに掲載
- ・ 岡山県中学校教育研究会岡山支部の「研究のあゆみ」の冊子に掲載
- ・ 日本教育心理学会でポスター発表
- ・ 岡山県教育工学研究協議会の冊子への寄稿
- ・ 研究メンバーが所属している会での発表

② 地元メディアの取材依頼

従来から、研修会の講師としてお願いしている地元メディアの方に、本取り組みを取り上げてもらえるよう働きかける。

③ Web上への取り組みの発信

④ 2年間の実践事例をまとめた冊子を作成

- ・ 岡山市内の中学校へ配布
- ・ 岡山県中学校教育研究会（情報部会へ提供）

8 アンケートの分析

(1) 意識の変容について

各研修の前後でアンケートを行い、意識の変化を調査した。その結果は次のとおりである。

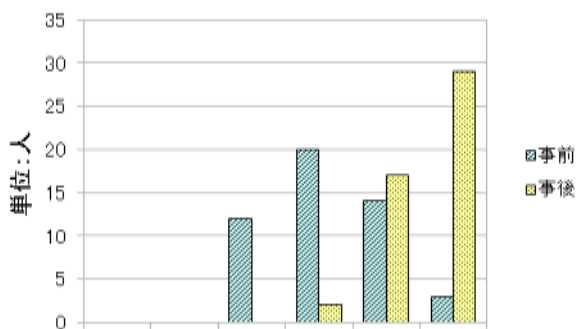
問1：アナウンス，発声練習の基礎を知っているか。

研修前は、アナウンスや発声についてあまり知識がなかったが、講座終了後は知識が大きく上昇している。

問2：放送機器，マイク，レコーダーなどの使い方を知っているか。

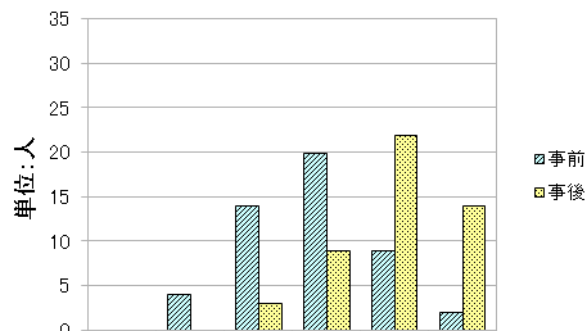
機器操作についてはほとんど知らない者が多かったが、研修後は知識が上昇した。

設問1 アナ, 発音の基礎



0: わからない 1: 全く当てはまらない 5: 全くそのとおり

設問2 マイク, 機器操作



0: わからない 1: 全く当てはまらない 5: 全くそのとおり

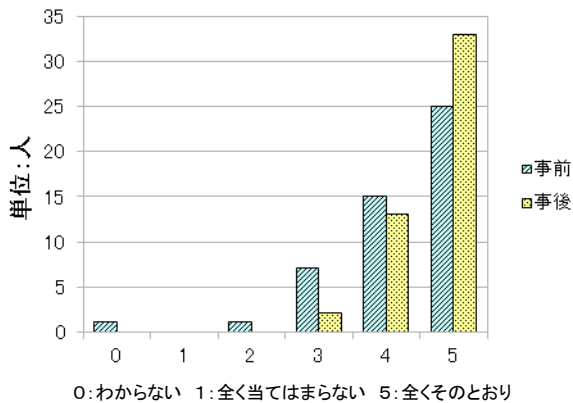
問3：放送番組（お昼の校内放送）を作りたいと思うか。

番組制作の意欲はもともと高かったが、研修後は意欲がさらに高くなっている。

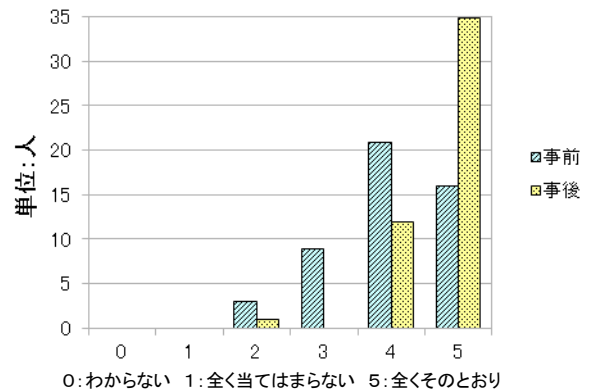
問4：初対面の人と話をすることができるか。

初対面の人へ接する勇気をいくらかもっているものもいたが、研修後は勇気をもつ者が著しく多くなった。

設問3 番組制作の意欲



設問4 初対面の人への勇気



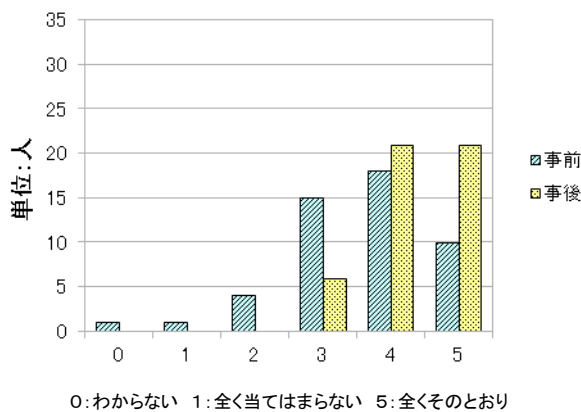
問5：インタビューをすることが好きか。

インタビューが好きという者は研修後やや上昇した。

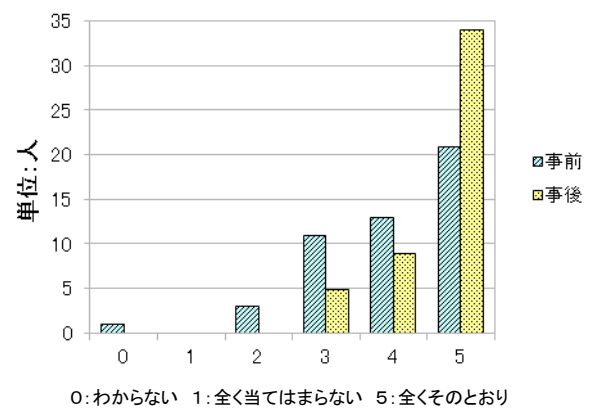
問6：インタビューからわかったことをまとめて、番組を作っていくことをやってみたいか。

録音構成への意欲は研修実施によって強く上昇した。

設問5 インタビューは好きか



設問6 録音構成の制作意欲



まとめ

本研修により、今回調査した何れの項目においても、強い意識の高揚が見られた。特に、アナウンス技術、インタビューするときの勇気、録音構成への意欲では、著しく意識が高まった。

また、番組作りに全く興味がなかった生徒が、研修後、録音構成に強い興味関心をもち、積極的に制作する姿の報告がいくつかの学校からあった。

(2) 教師の視点でまとめた生徒の変容

① A校

- ・自分の気持ちを表現できるように変容
- ・自分なりに計画し始めたラジオ番組

具体例

- ほとんどのものも言わない消極的な生徒が、自分の気持ちを普通に口に出せるようになった。自分のことも相手に話せて、誰とでも話ができるようになった。
- まじめなリーダー的存在の男子1年生。機材についてマスターしてもらいたい生徒が、インタビューの相談のとき、お互いどういうことがやりたいか話し合い、楽しく話げた。自分のことを言葉や行動に表すことができるようになった。手際よくミキサーを操作していた芳泉中の先輩に感動した。
- 部長候補のしっかりものの2年生女子生徒が、自分のことを言葉で表現できるようになった。どんどん掘り下げて聞くということを学んだ。今までは自分が話すばかりだったか、聞き手に回ることもできた。リアクションしたり、質問したりできるようになった。
- まじめで硬派な2年女子生徒が、事前アンケートの「初対面の人と話すことができるか？」が「4」で「あてはまる」だったのが、事後では「5」の「全くそのとおり」へ移動した。秋からのラジオ番組の計画を自分なりに立てていた。

② B校

- ・初対面の人と話すことができるように意識が変化
- ・他校の生徒のやる気を引き出した班での研修活動

具体例

- 初対面の人と話すことが苦手な2年生の生徒が、番組作りでは、意見を聞いてまとめる努力をするなどしていた。事前アンケートの「初対面の人と話すことができるか？」が3だったのが事後では5へ移った。
- 積極的な2年生の生徒が、はじめ班長として、意見を投げかけてもほかの班員からの反応がなかった。2日目の午前中、一人でシナリオを作り始めると他校の2年生が席を移動してきて、二人でシナリオを作り始めた。そのあたりから、緊張がほぐれてきた様子であった。最後には、班員が互いに顔を合わせて「みんなで手をあげよう」と打ち合わせをスムーズにできるようになっていた。
- 落ち着きのない1年生の生徒が、番組作りで積極的に提案した。うまくまとめて話すことを頑張った。充実感を味わったようである。
- 1年生の生徒が、事前アンケートの「初対面の人と話すことができるか」が「4」だったのが事後では「5」へ移った。

③ C校

- ・ 積極的になったインタビューや番組制作
- ・ 他校との交流を通して新しい自分を発見

具体例

- 生徒 A は、事前アンケートではインタビューに意欲がなかったが、実習中は自分と意見の違う人の話を理解し、自分ひとりでは思いつかないアイデアを思いついたり、班の人と仲良くなれたりする体験ができていた。また、自然に班のみんなと話ができるようになっていた。事後アンケートでは、インタビューすることが好きになり、学校とは違う自分を話し合いの中で発見していた。
- 生徒 B は、自分のことを知ってもらうために、体で「私は明るく元気」というのを表現していた。
- 生徒 C は、今まであまり初対面の人と話せていなかったが、話し合いやインタビューを通して、話ができるようになっていった。番組制作にますます積極的になった。
- 生徒 D は、「活動を通していつの間にか友達になっていた。人前での発表が苦手だったが、みんなを平等に当ててくれたので、とてもうれしかった。これからも頑張ろうと思う」と意欲を見せた。また「普段と違って、今回は自分から頑張って離しかけてみた。するとみんな明るく接してくれて嬉しかった」と話していた。

④ D校

- ・ 楽しかった問題解決のための協力や意見交換
- ・ 積極的に自分で考えを出すことのおもしろさを実感

具体例

- 放送研修会前は「番組制作」「プロのアナウンサーによる講座」に関心が高かった。「発声、インタビューの進め方、他校の生徒との交流」にも関心が高かった。しかし、放送研修会後は、楽しかったことの一因として、「新しい友達ができ、友達との交流ができた、関わられた、夜部屋での話が楽しかった」などが挙げられたが、それ以上に制作活動で交わした意見や問題解決のために協力したことを具体的に挙げている生徒が多かった。例えば「編集中心が楽しかった、アイデアを出し合った、もっと番組を作りたい。話し合いをしたこと。目的のために自分の意見を出しながら締め切りに向けてグループで活動する過程で自分でも驚くほど親密になれた」などである。積極的に自分の考え、意見を出すことの面白さや大切さに触れた生徒も多い。「また参加したい」という生徒が多かった。インタビューに関する部分に評価が高まっている。インタビューの難しさに改めて気が付いた生徒が多くいた。次回は「番組作り」がしたいと話している。

⑤ E校

- ・シナリオ作成中に見られた変容
- ・番組製作を通してできた仲間づくりと自信

具体例

他校との生徒の交流は楽しみにしていなかったが、容変が見られたのは2日目のラジオ制作のころから。互いに協力して準備するということをしていなかったが、シナリオ担当の生徒が苦心しているのがわかると自ら席を立ち、2年生のそばでシナリオの作成を見るようになった。次第にお互いに意見を交換しあい、打ち解けた表情になっていった。最後には自らICレコーダーを手に取り、マイクを担当者に渡すなど、生き生きと取材活動に出かけていった。編集活動もお互いに声を掛け合いながら作業を進め、楽しそうに番組制作に取り組んでいた。

生徒の声

- 自分は人見知りだったけど、番組製作を通して「友達になって」と言わなくても、自然と話が盛り上がり、最後は笑いが耐えなかった。
- みんなでお互いの学校の話インタビューして楽しかった。インタビューする側の聞き方やリアクションの仕方なども、相手の気持ちを深く考えてするとよいことがわかった。
- 自分でもうまくなったと思う。来年も参加したい。お昼の放送のために、何か番組を作りたい。

今回の研修が大変有意義であり、仲間作りや放送技術のために自信がついたことが伺える。

全体を通して、一人ひとりの自己評価が上がっていた。より具体的に自分の発声練習の目標が持てた生徒や、インタビューの楽しさを知り、自分もやってみたいと感じた生徒が多く見られている。達成感を味わうとともに、新しい仲間ができたと感じることができた様子。それぞれ「楽しかった」「来年もまた来たい」と手を挙げてくれた。

特に、他校の2年生に感謝したい。「敬語を使わなくていいよとってくれた」「自分の意見やアイデアを言いやすい雰囲気を作ってくれた」という生徒の感想があった。番組制作の手順についてよい手本を見せてもらえたと思っている。授業日には難しいだろうが、またこうゆう機会をもてたらいいなと思う。他の学校が日々どんな活動をしているのか教えていただけだけでも、生徒たちにはとても参考になると思う。

⑥ F校

- ・全員がグループのリーダーとしての時間を持って活動
- ・積極的なコミュニケーション活動が継続中

具体例

- 今まで3年生が活動の中心となっていたため、番組制作も3年生に任せてしまっていたことが多かった。しかし、研修会后、今では全員が各グループのリーダーとして自覚を持って活動することができている。

- 今年度は今まで消極的だった取材活動にも進んで取り組む姿勢が今もなお続いている。(10月中旬) 教師とのコミュニケーションの場面が増えてきている。
- 今回の研修で、他校の生徒にも活躍ぶりをほめていただき、それが生徒たちの自信につながったようで、今までは他学年の生徒との交流を好まなかったのですが、今では後輩の中に自ら入って行き、中心となって活動している。
- 研修後、取材活動にも積極的に参加、インタビュアーにも進んで挑戦することが増えている。自分の担当以外の特別番組の取材活動にも常に楽しそうに参加している。機械の操作やインタビューも、怖がらず挑戦するようになった。番組作りにも積極的に取り組んでいて、生徒、先生へのインタビューやアンケート調査にも楽しそうに活動している。

⑦まとめ

研修中、研修後の生徒の変容は顕著であり、本研修の効果が大きいことが分かる。

一人ひとりの生徒の変容とともに、放送部としての活動意欲が増し、校内放送の活性化につながるコミュニケーション能力の向上と、情報活用能力の育成ができたと考えられる。

9 指導者からの講評

従来から、情報教育を通した生徒情報活用能力の育成については、数多くの実践研究事例が見られる。しかしながら、普段ほとんど交流のない学校間、生徒間の交流による情報活用能力の育成及びそのような能力を育成することに伴う、生徒同士の人間関係作りや学校づくりを視野に入れた、継続的かつ組織的な実践的な研究はほとんど見られない。

本研究では、こうしたことの解消に向けた実践であり、人間関係づくりを核とした学校づくりを試みるという、極めて実践的で意義のある研究である。

学校内だけでなく、学校間の生徒同士、あるいは教師同士の継続的かつ組織的な交流により、普遍的で生きた情報活用能力を身に付けるだけでなく、お互いに理解し合うためのコミュニケーション能力の育成、人間関係づくりは、これまで看過されてきた学校における教育の重要な役割である。

以上、本研究の成果は、社会に適用できるような一般性の高いコミュニケーション能力、人間関係育成能力に焦点を当てたものであり、極めて意義のある実践的研究である。

10 研究組織

平成 23 年 4 月現在

グループ名： 岡山市中学校放送研究部会			グループメンバー 合計 16 名
	氏名	所属・職名	役割分担
代 表 者	秋 森 洋 子	岡山市立吉備中学校／教諭	研究の企画立案及び推進
共 同 研 究 者	平 松 茂	岡山市立岡北中学校／校長	研究推進, 評価とまとめ
	荒 尾 真 一	岡山大学教育学部／特任教授	研究のマネジメントと評価
	上 田 達 伸	岡山市立上南中学校／校長	情報活用能力の評価と提案
	中 倉 智 美	岡山大学教育学部附属中学校 ／教諭	部活動実践のまとめと評価
	三 好 正 直	岡山市立岡山中央中学校／教諭	取材に関する指導・効果の検証
	藤 原 昭 雄	岡山市立福南中学校／教諭	録音構成の指導・効果の検証
	山 本 奈 穂 子	岡山市立芳田中学校／教諭	放送部活動実践
	川 上 信 子	岡山市立岡輝中学校／教諭	インタビュー・機器活用の指導
	兼 高 公 子	岡山市立後楽館中学校／教諭	放送部活動実践
	香 西 誠 二	岡山市立吉備中学校／教諭	放送部活動実践
	小 倉 明 子	岡山市立後楽館中学校／教諭	放送部活動実践
	高 田 直 子	岡山市立竜操中学校／教諭	放送部活動実践
	高 木 直 美	岡山市教育委員会指導課 ／指導主事	指導助言
	笹 野 恭 代	岡山市立石井中学校／教諭	放送部活動実践
岩 田 亜 希 子	岡山市立桑田中学校／教諭	インタビュー・アナウンスの技 術指導	
助 言 者	淵 上 克 義	岡山大学大学院教育学研究科 /教授	研究の方向付け, 指導助言

文責 平 松 茂 岡山市立岡北中学校長